



近世祝美少年録

四編  
壹



~ 13  
3567  
16





門 へ 13  
號 3567  
卷 16

曲亭翁口授

# 近世說美少年錄

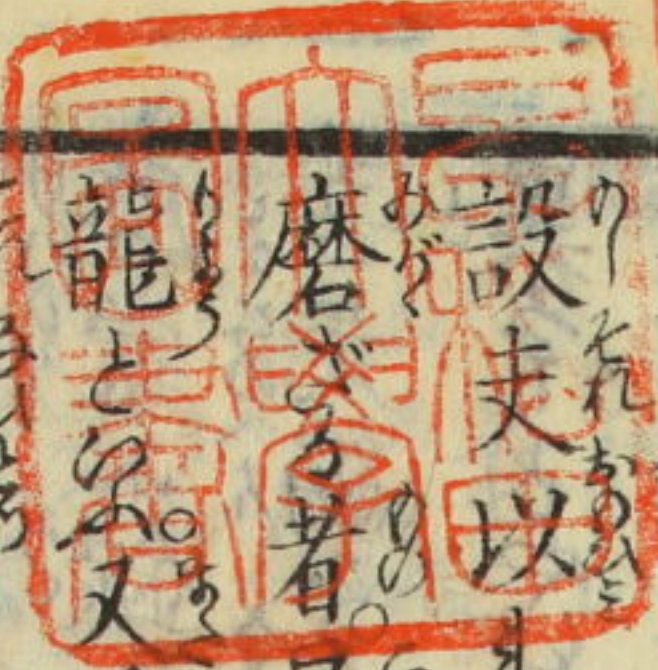
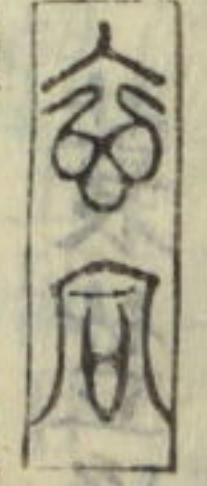
冊五

大學 圖書館  
34.6.3  
燹書

## 一陽齊豐國畫

文榮堂  
群玉堂  
精刊

新局玉石童子訓小序



設使以和漢今昔其名同くして其物同トからざるあり玉の  
磨る者足と璞といふ胤の既死したる者亦是と璞といふ鱗族は長と  
龍といふ又星宿を龍といふ駿馬の千里なる者亦是を龍といふ此ハ  
是一名小あろく二物なり又鳥の子を雛といふ上巳の木偶亦是雛  
雛といふ恁る類極て多有り在昔唐山魯の哀公の時魚目曾參あり  
ある孔門の隨一人賢也て且孝有り是時小當りて宋國小曾參と  
云者あり其性克悪なりて為さることなり後竟小人を殺して彼身刑  
せらる其璞と云將龍と云雛と云曾參といふ其名一なり其物の異なる  
と辨むると死に死宵壤の差別あり世小由縁もまた高名な君子の名  
號を冒紛らして生活の便宜小做る者あり唐山の曾參と天朝の



人麻呂と馬を異るらん昔ハ天朝ハ人麻呂と稱する者前後七人あり然れども古俗今俗人麻呂と云ふは柿本氏を指さるる一那高名才子の名號と取てゆぐ已が名として世俗と眩惑ある者只其名の同くあて技と心術と同トからざるに竟ハ相及する者比々として皆是なり非如百曾參百人麻呂ありといふとも彼の曾子と我柿本氏ハ損益あると云其才其徳同からざる故なり又其物同くして其名の同くらるるハ萬をのり數ハ古歌ハ所云浪速の蒹葭ハ伊勢の濱萩今更毛筆ハ違あらむ本草啓蒙ハ録する所一物ありて數名あり土呼方言も亦知らざるべからん今吾是編ハ名けりも他と相似る意味あると云ふ是も亦其物同くして其名異なるべからん漫ハ自笑して毫も著作堂の南窓言ハ小可く

弘化二年乙巳春正月之吉 蓑笠漁隱重序



新局玉石童子訓卷之上帙五冊目錄

卷之一 上冊 第二十一回

自傷落花惑眾人 無明臺月 繫正婦

卷之二 下冊 第三十二回

畀書刀弘元托母子 憑寺僕兩少 知義姑

卷之三 上冊 第三十三回

鑽穴隙二賊骨御徒 呈生口兩少 解疑獄

卷之四 下冊 第三十四回

賞罰異路乙藝還家 九四郎五金齋 晴賢

卷之五 上冊 第三十五回

陰德陽報如如來導樞 積善天感落葉賜其實





海草の種を植て性も  
 男山

處女億祿  
 をとりく

峯張九四藏  
 中原通世



暗鬼生於疑  
 心君勿見脹為  
 姓

三好木工頭  
 職善ゆに

真嶋皆人  
 頼紀

三好木工頭

文溪堂



峯張茶六郎  
中原通能

麟子  
花玉  
美

茂林四郎  
天江成勝



風さくみらけ  
とち根をたん  
武備まきりの  
時平あまを  
盲文人

狸毛吹五郎

低杭駝鳥太



文溪堂藏





孟林禪刹  
青松靜  
二世傳燈  
月照牕

木玄道德  
勢

俠客六市  
勢



るてりふかくも  
さたりるむかひも  
陰のちの野の  
草のさえ間小  
玄同

賢妻乙女  
勢

乾兒四摠  
勢



附言 本編の作者又曰這書五卷の往壬寅年の初春より中夏の時候まで終りたる吾戲墨也。一局五卷あるを釐て十冊とせし價を廉くす欲する。刊行の書肆文溪堂の好由より然とも老眼不明の故に竟に戲墨と排作して後の五冊の稿本も全うしりと。這番又文溪堂を連りて促せし上帳五冊を筆削して其主員と筆するを。下帳五冊又其足らざるを終り果てて續てて發販とす。上帳下帳と併看され佳境に入るの好處を造りて遺憾なきを。一需要時の程也。下帳の發脱も遠くさうさうに只恐る病眼衰眊なるの後に代書と婦幼の課され誤写るにとらざるべし。譬へ八犬傳第九輯卷の四六以下に代書并備工の筆の誤る者多かり如彼書不真言宗の宗と音の他り或は据と樵唱との偏と脱して居焦官小作者の餘も猶あり皆吾腹稿の所備あるを誤るもの校訂も亦婦幼に任せ吾腹稿の發脱の後好友知音の指摘因て知るも是編も甚麼るを魚の誤をわん看官宜く正され

新局玉石童子訓卷之一上冊

東都 曲亭主人人口授編次

第叁行回

自傷の落花舟人を惑む  
無明の臺月正婦を駭かす

在昔孰の御時孰の國不汝ありん槐の御蟻宮村と云一村落不架空先生と喚做する生儒ありなり原是京家の学士也て江家の流と汲む者あるも其性清白不過て世と推移るとも竟に這頭は流寓して里の鱈魚を其迹を教るとして生活の程小客と愛する癖あり習見者皆辭去る最徒然るもの田丈山妻這那と云く訪來ぬ毎其好む處の神史小説と説和は或の古人の賢不肖善惡邪正と論辨して善と薦め惡と懲し自警め他と戒めを尋りければ御黨も相欽ひ信て皆其話説と听きと然に架空先生有一日研他の



暇ある在客もろろ連立て来りけるに集へて是れ告て道く俺昨宵奇妙なる夢を  
 見たり。夢の果敢る者るれば泡沫夢幻と浮屠家も説いた渡莫周禮小上  
 夢の官あり。上古唐山姫周の時原夢をりて事の吉凶と判断あり。然るに我  
 大皇國の邊。古の貴賤夢を取る事あり。崇神天皇の四十八年春正月己卯小  
 天皇詔して。兩箇の皇子。豊城命と活日尊の各商あり。夢ありて。天日嗣を  
 定めぬの事。日本紀小見をり。又欽明天皇。初皇子少て在り。時瑞夢空ま  
 かききて。後竟小大位小即ぬひあはれ。佳れば丁固の腹小松生ると。夢小見て後  
 竟小之公小登りしと。評しうと。と。俺見し夢とは是等と異なる。各位  
 もゆりり。近昔世小隠れる。那惡青年。未朱之夕晴賢が人成りし。大  
 和の由縁を立去りて。浪速の浮世袋屋にて不測の禍を醸した。其事の起りま  
 ち。既小世小ゆえられども。其後の事の甚麼を。是と知るより。多り。小所云昨宵俺夢

他が上。就て其後の変ひのゆへ。而善童年とゆえ。大江茂林四郎成勝。峯張流太郎  
 道能。主僕小世の顛末も。具小是と知る。ゆへ。母も。為小説。出さん。飲言長くとも  
 聞き。と。小大家飲ひて。と。その年来日屬より。渴小水と欲も。如く。思ひ事小  
 ゆり。ゆくと。促せ。架空先生えり。貌小書案引よ。せ。扇子と。物語を及びけ。  
 却説。未朱之夕の料ら。住吉の十二屋九四郎許。旅宿の程。酒癖の舊病  
 禁め。當晩那乳守の黒妓院。浮世袋屋。名も。ある。今様と枕と。並へて一夜の  
 夢を結ま。欲せ。小憶小似。今様の。猛可。小痞。發りぬ。背推。向け。陽。睡。を。  
 呼び。揺動。せとも。忘。是。事。の。趣。前。輯。第。三。回。の。結。末。小。寫。半。た。れ。今  
 又。小。具。小。世。然。い。と。わ。れ。朱。之。夕。月。瞻。る。宵。の。雨。障。り。雲。と。做。る。是。樂。の。心。  
 央。る。ま。酒。の。醉。ま。真。覺。て。腹。を。一。ま。涯。り。る。を。罵。徳。さ。い。ち。雪。を。左。右。ま。  
 思。ふ。も。俺。青。樓。の。遊。樂。の。只。是。今。宵。創。る。が。意。氣。地。と。ら。小。疎。け。れ。と。這。奴。何







簾次是之思ひけるは這為体人を殺其身も殺さる素より覚期の上るべし。  
 柳御身の那里の人を此処來歴怨の顛末一事も隠さず告め天も明は許さず  
 守の御謙断を仰せられたるを急迫し問も毫も噪ぐぬ朱之介答へて  
 主人の推量酷く錯へ俺豈何等の怨あるか。是茶座と做さるるは俺の大  
 和の旅客を末朱之介と喚做さる者より比より住吉より十三屋九四郎許淹留止  
 宿の徒然不堪され九四郎の乾見多六市四摠と喚做したる二の壮伎を相俱  
 して今宵這里に浮れ來り解語花を酒菜とて夜と共にと思ひし。佳境に  
 入る六市四摠の逃去りて鈍俺の這里に在り。這今様と呼取り小自餘の娼  
 妓も聚合を艶曲歌舞小慰めらる。其席稍竟りて臥房に入り趣も多。俺  
 敵もこの這今様の持病の瘡發りぬと背向臥て呼ぶも答も浮の空吹く  
 風暢ふ出口の楊柳さらねも靡くと恒る河竹の意ふ死即ありとも財貨小

儘さる一宵毒が客と客ともせきりける。在れし憎か。罵懲さるるを俺さ  
 酔も勝され。儘小熟睡して小夜の深るを知らざりける。枕血臭く衣濡り肌膚堪  
 ぬ。驚き覺て枕上る這灯の光が就て四下と見ると思ひける。今様を俺  
 榊の仍刀を自殺して俯て在り。最後より凶妻おち教馬は。鼓耳と涯り。妓有  
 り。呼びの這故えり。亮察あれ。と詞徐説示を暖簾次听し沈吟して  
 くる趣真とも。鄙語云死人を語る。今さ。御身の片言の何ぞ疑ひを解く  
 あり。あや。箇に処。神明あり。明に処。王法あり。一も入ら。二も入ら。里長も告。且訟  
 あり。て。虚実の曇らぬ鏡。做さ。守の御明。衆の依人の。這方へ來ませと。面個の妓  
 有。小朱之介の。両も捕せ。推立。老鴉子。舎小屏。居て。人を  
 て。守を。左右。程。早天明。不。客の。皆。去り。娼妓。其  
 頭。在。然。早。閉。静。情。青。樓。然。寂。寞。只。朱。之。介。守。



彼有及常備の爲見とら。究竟の壯伎者四五名其里小集合居り。余程の暖  
 簾次は猛可小人を走せて。這事の凶変を里長ふ告知らる。又住吉の。十三層六  
 六の等を告て朱之众の那里ある。旅客あるや。と問せらる。是れも乳守の里長故老  
 們的浮世袋屋を聚ひ来て。先今様の亡骸を檢し果て却朱之众の。と聞きし。所正  
 告訴一通ふ載る。暖簾次と共に。好の陣館へ許けり。是時京都の  
 管領高田入道常桓も。屢に好海雲と戦負て。没落して伊勢に在り。其時  
 左甲并浪速津の。新管領右京大夫晴元の領  
 地を。京臣三好筑前守元長入道海雲の一族ある。三好木工頭職善ハ一隊の士  
 卒を従へ。則浪速の陣館に在り。其日乳守の被院る。浮世袋屋暖簾次が  
 里長們と俱ふ。詔めて。娼妓今様を横死の事。其客朱之众の事の趣。又詳ふ知  
 られ。職善則其隊の頭人息嶋皆人頼紀を使として。其の虚実を檢せむ。

頼紀則伏兵を將て。浮世袋屋に赴き。先今様の屍骸を檢し。他が出処を詰ふ。  
 暖簾次答て。這今様の出処西國へと。夢の。を親異詳らむ。今より七八稔  
 前より浪速の乾父ひて。あるより十稔期に買取り。娼婦せひ。其乾父某  
 甲へ前より年身故り。外縁処にひり。又今様を害し。青年見の旅客。旅客  
 ちらぬ。知らぬ。も。熟客のひつ。と報る。頼紀點頭て。却朱之众と召きて。其の  
 顛末を質問。朱之众の阿容なる色。御向の暖簾次。説示。其事の顛  
 末。一句も錯。陳れ。頼紀。頭を掉て。其言究。胡論。非如。孰睡と  
 考。枕と並て。臥る。娼妓の自殺。知らる。且今様が身。傷り。休  
 が帯。なる。双。その。衣。身。流血。流。裕。と云。恰。と云。這娼  
 妓を殺せ。何。あ。是。誰。疾。縛。目。本。響。共。侶。伏。兵。者。ち  
 兼。り。以。應。果。走。り。蒐。る。朱。之。众。緊。く。結。扭。と。推。居。け。り。免。れ。死。禍





玉石童子訓卷下

十

文溪堂藏



玉石童子訓卷下

文溪堂藏



鬼の冤屈係る。朱之介の慌て感ひて。跪に々頼紀のら向して陳るや。御  
 疑ひさるるとらら。小人實ふ今様と殺さ家の大和の上市小在り。婦婦主人落  
 葉が女婿を妻の那家の女見おほり。小人のいゆる比より。生活の為左界小落。這  
 頭の人を待より。あて十二屋許宿小ある。且左界の船積荷三太と其子  
 城藏小昔縁あり。城藏と召よきて問せらる。分明老御疑ひ解けらる。いそそ  
 と諄々を頼紀听を。冷笑ひて大和の岳母ありとも。又左界の荷三太等小  
 昔縁ある者るればとも。人を殺さむと云ふ。分説あるべしや。いそそあて陣館へ参  
 下てとと叱禁めて却乳守の故老等を見くらりて。你等又蝨く住吉赴たて  
 這朱之介が宿入ると云九四郎をねて廳へ参れ九四郎倘家小在らる。還るを  
 俟て明日ねて来よ。急げくと赴立遣りて。卒や浪速へ退んとて朱之介を牽  
 立させ。馳て樓上より下り来られ。暖簾次里長のいりり。浮世衣屋の主會

妓有武鳥兒多。王の安危心許り。準備の裏飯を二兩個の小厮  
 馳せ相従て陣館へ参りける。介程小息嶋皆人頼紀を日景教く時  
 候かへ来ぬ。三好の陣館多局の内へ朱之介を牽入れきて。伏兵并小暖  
 簾次里長等小守らせ。那身の則後堂小造りて。三好木工頭職善小娼  
 妓今様が横死の為体。罪人朱之介が陳る言の趣を箇様々と報  
 せ。職善听て介ら。俺も听べと。其儲をのせせらる。有斯程小暖  
 簾次里長等。廳の局の片隅小等と半响許りて。三好職善。席あり有  
 司息嶋頼紀等侍坐して。先朱之介を檐の下小牽居させ。職善みづら。其  
 罪を質問ふ。朱之介又答る。始のど。今様の自殺を。小人が害せり。さ  
 ぎ。このを職善叱禁めて。你の只管冤枉と唱て。云云と陳されども。今様と刺  
 殺せん。則你が中刀を。其身も鮮血小冷れ。さかた。正老死照据ある。



休が數日の宿へと又十二屋九四郎と左界の城藏とも召をせ。事の虚実を  
 鞫問ん又娼妓今様の乾父既お世を去りて縁所る死者るる其亡骸を暖  
 簾次第の形如く執措べ。猶も詔る美あふ異日亦復召をせたる意の  
 宣示して身の暇を賜り朱之介が開が儘の獄舎敷敷に  
 而木二頭職善の次の日も朝より地方の民の懇訟を所定を在りける程  
 日息嶋皆人頼紀お吟吟と乳守の故老の住吉の里長と共侶十三屋  
 九四郎が女房乙共藝并九四郎が乾兒六市四摠とぞ詰ま由ゆえ又左  
 界の浮宝屋船積荷之天の活業の為の日其子棧太郎と俱周防の山  
 口ある枝店小赴て今の家おらむ又勇城藏の昨今感冒の疾病をうち臥て  
 ひへ口得主管白鼠七と喚做ま者摠代とて参りひひぬとゆえ上げりあの時前  
 廳果一職善則局の内へ乙藝崩七六市四摠其地の里長をいへん朱之介

とも獄舎より牽き出せて先鼠七お詔るやう白鼠七休の這朱之介と認めりや  
 他既お陳とく荷之太城藏と昔縁ありとゆり実お然るや甚麼をぞと問  
 へ鼠七額衝る頭と拾げて備る朱之介と見えり然るに這青年見ら  
 さらつ比大和の旅客より也沙金と唐布を買んと左界の店おあける折  
 唐布の船間中より入津せり一姑且止宿を饒せ淹留一向を經ぬ隨ふ  
 好の噂のありき主人荷之太飲む猛可辨て立去らせゆは但是止宿の  
 旅客也荷之太親子お昔縁のあれある者ありりとの職善點頭てやれ朱  
 之介は然る後今鼠七の稟を所荷之太お昔縁をいひ詮伴知るべきの  
 とゆれて朱之介頭と拾げて脚錠をひへる小人荷之太城藏お縁ある者の  
 りねも那家の新婦黄金の正に昔縁のいとりの果を職善の忍れる聲を  
 震立て黙れ慥見舌長し休嚮も荷之太親子お昔縁ありと陳あし今



用七ふるるとりて又其新婦は舊縁ありと言ふ愛人を易て伴陳さる賊  
 情分明最鳥許すと叱懲して敢又辯を饒さる職善當下檐廊のり  
 たる。真嶋皆人頼紀を見ぬそ住吉る里長は何ぞ九四郎を俱せしむ  
 妻と乾見をねて来ると問ふ頼紀額に美て然し九四郎の前日講殿家  
 と共侶ふ安藝の嚴嶋を辨財天へ詣んと船中とていへるの召元がその  
 故小里長も相計り九四郎が妻乙藝同宿る兩個の乾見六市四摠と喚做  
 者ど俱して参りぬ之件六市四摠は前夜朱之介の葉内しむ浮世袋  
 屋小適に者之勿論夙く辨し去りて止宿せると宣せとも連係る者ありぬ  
 召俱さるひたと告れば職善又點頭て馳乙藝と六市四摠と檐頭近く口よ  
 せ先乙藝ふ諮るやう徐く良人九四郎の素は何等の由縁ありて朱之介を留置  
 せると問へば乙藝答てやう否縁も好もゆねも他いぬる日奴家が家の隣る

岸松屋てふ客店と宿せんそあけりふ其岸松屋の近に比生活既ふ衰  
 他御小移りて在るなり一忽他困小て云云とゆい良人の依氣りく不便  
 必思ひけんを随留置在せし九四郎人小誘引れて安藝へ出船の留守の程  
 思ひけりた福鬼小胸のまはれはまも九四郎在ぬとの餘の事の豫より夢  
 事いぬるがかとといひ職善又點頭て然らば又六市四摠は朱之介と共侶小娼  
 妓の席小連りまう何ぞ又馳く辨し去りたると問へ六市四摠は言語齊一  
 答るやう然しかの折小朱之介が醉ふ乗して乳守ふりて復喫んとて誘引其  
 放さねば己こもれ共侶小那里まで行かど乾父老は九四郎に任侠と磨く心と  
 小人毎を放言て四下近に艶御小止宿と饒しぬ後小知られんと泊れて辨  
 去りてあそひぬれといふを職善うち笑ひて非如止宿せざるあれ其席小連り  
 猶云云と陳さるも五十歩をりく百歩を笑ふといふ古語ゆめ似るべし



と左まね右もあれ。実小朱之介の旅客を六九四郎が宿所必他を必裏ありん若們それを知らざるやと問まて乙藝に答るや否朱之介は裏を雨衣菅笠のふしと然せる東西のひを但盤纏圓金を二百九十五兩ありと九四郎が起つ折他が多より預りて奴家小藏置ねを開き儘遊興しゆるはと告るを職善うちきて開き最長は盤纏へ依其金もてあるやと問ま答て御説の如く這義を問まてのありやせんと思ひて里長達の商量して隨懷中て参りおたとの職善微笑て開きよくあそびつたれ其金を疾見せるとまて乙藝の邊へ頂小掛る財裏の紐を解披る件金の裏に隨ひまをれ。真嶋頼紀受令て躬主君小進を職善をり机案小登して二襲裏る紙を徐小解開て先其金と得と見り又其金の裏紙を推伸して是を見て眉と頻り頭を傾けて乙藝這裏紙の始よりこれある然らば又九四郎

裏て休小遊興を後と問へ答て否其紙の朱之介が裏る隨て良人が預てゆりたとの果ぬ小職善の机案と檝地と拍鳴して怪むべし這紙中を有驗觀主舌命道人と寫してありやれ朱之介は是は你が跡多やと緊しく問まて朱之介は深念小及む答るや。現小然るもゆひは裏小入船積荷三太許逗留の折人の望し玉の近曾舌命道人と喚做を者あり他煉金小哄騙とて豪農巨商を惑して幾千金と掠奪りゆ其術益量りとの異聞怪く奇しければ後亦人小夜話を折其名を忘れざらん為小懐紙小書寫を小果の忘る我金を九四郎小預る折猶懐小あけける其紙をのり重裏多く遊興するゆゑのあり隨小はえ上れは職善冷笑して行遊事皆亮察あり近曾有驗觀主舌命道人と喚做を奸賊あり他は肥後國飯田山小あける山賊の頭領川角頭太連登殘黨也鐵屑鍛冶郎即是









十七

大正七年上



一枚の惜字  
紙の藝を  
連繫を  
ま

六市



工とゆらける。當下二好職善の佐とて藝を習ふ疾視て約莫去の條の疑ひ  
 獨朱之介のさるらむ。九四郎も鶴賊也。鍛冶郎が支黨多る。故何とる。他  
 面善見るとぬ朱之介が索絲來ぬ。洋松屋があらる。事好む。朱之  
 介を己が家小禁めり。必是情由あらん。然とも九四郎。今西國の逆旅に在る。  
 還ると俟て召捕て其折ちて女房に藝と六市四摠を林示獄せらる。亦要  
 ある。保質也。縦九四郎を求獲むとも。他異日名告て出ん。兵毎索と被む。と  
 思ひける。再度の下知ふ。藝六市四摠多。胸を渡す。恐れ惑いて戦れる。南の  
 合を開け。情を御裁断九四郎。人不知れる。使者を侍る。何を其人の  
 舌命とる。伏計る。里長を首也。照人の言かふ。そのを思召れ。と  
 叫べ。六市四摠多。俱小冤屈と叫ぶ。饒さる。死ふ。これ。伏兵を十と  
 揮閃ゆ。益る。諄言黙らむ。と背肩尖。此彼と。多。撞悩。推並て。

結紐とて。韋居けり。當下住吉の里長。膝を找ぬ。あそく。息嶋皆人の  
 稟ま。う。畏れ。勸解なる。十三屋九四郎。地方久し。使者也。善小興  
 悪と。拉だ。威勢ある。中。諷らむ。錢財ある。從。乾兒。義子。弟の。兄。の。銀  
 治郎と。狭。人。交る。う。ゆ。這。美。を。仰。上。ら。れて。乙。藝。六。市。四。摠。多。を。饒  
 さ。せ。ぬ。あ。の。上。の。脚。仁。慈。み。を。ゆ。め。と。願。を。職。善。う。ち。て。思。入。里。長。多。千  
 奴の海。測。も。人の心。量。か。ら。り。九四郎。仁義。を。信。て。陽。使。者。と。誇。る。と。も  
 陰。邪。術。奸。虐。の。交。を。做。事。做。さ。る。何。人。狭。く。是。を。知。る。若。們。夙。く。惑  
 い。を。覺。し。て。九四郎。が。還。る。來。日。小。欺。せ。ぬ。く。參。ら。ば。是。第。一。の。忠。節。也。時  
 宜。し。く。賞。禄。を。給。ふ。然。る。猶。惑。し。を。取。て。諄。々。と。願。言。其。若。們。も。饒  
 益。を。無。益。と。と。叱。懲。あ。つ。才。の。言。を。和。け。て。左。界。の。向。九。廿。何。二。大。光。侯  
 鼠。七。兼。れ。荷。二。天。父。子。の。朱。之。介。小。舊。縁。ある。者。ら。ね。ども。賣。買。の。便。宜。也。



去りて 止宿を饒せしものさへ又詔ぬべしものもる。退かき異日城藏を疾病魔  
で果る折参りて其義をいへ上上大家都て心給ふ言歎と言病者揚小直示  
其罷立ねと頼紀が列に聲小白鼠七里長故老も皆共侶唯々をさるり  
額衝美々うち連立を退出ける。介程小直嶋皆人頼紀ら伏兵獄  
卒等小下知と傳へて男女四名の罪人を升が隨獄舎不遣き朱之介を  
首で六市四摠と一牢中をこ執藝の女流のさるれば別小林示獄せらるる底へ升が  
中み朱之介のま糸是好人さるねども。這回罪過の冤屈を自作苦辭さる  
らる。況乙其藝六市四摠の毫も犯せる罪中を疑獄の縲絏を敷る。那身の憂  
苦甚う死時の不幸とあひあう一毫の諺れが差ふ千里を以て云易緯の格  
言果苦なる耳と貴と心と師と做を職善も後小覚る。遂小悔く思ふるべし。

新局玉石童子訓卷之一上冊 終





